

# 平成26年度 肥料農薬委託試験成績概要

## I. 福島県農業総合センター(一般)

### 1. 水稲

No.	試験課題名	試験実施場所	依頼者	新・継	結果および考察の概要
1	水稲疎植栽培法の安定化に向けた施肥技術の検討及び被覆尿素の溶出タイプの適応性確認試験(継続)	会津地域研究所	ジェイカムアグリ(株)	継(H25～26)	供試した一発型肥料区は、普通化成肥料区よりやや多いが、疎植区でやや減収した。品質は、疎植区で普通化成肥料区に比べ、一発型肥料区がやや劣る結果となった。水稲疎植栽培(11株/m <sup>2</sup> )において、溶出タイプLP40～LP100を配合することで、穂肥を省略でき、基肥－穂肥施肥体系と同等～同等以上の収量を確保することができた。
2	メテオ剤(ペントキサゾン)の雑草稲に対する除草効果確認試験(継続)	会津地域研究所	北興化学工業(株)	継(H25～26)	ペントキサゾン(商品名:メテオフロアブル)の除草効果を検討したところ、プレチラクロール(ソルネット1kg粒剤)と同程度の防除効果があった。また、雑草稲を含む漏生稲の除草として、ペントキサゾン－ベンフルセートの体系は有効であると考えられた。

### 2. 野菜

No.	試験課題名	試験実施場所	依頼者	新・継	結果および考察の概要
3	きゅうりにおける微生物資材の育苗時添加による効果試験(新規)	作物園芸部	JA全農(県本部)	新(H26)	微生物資材「ビオリザー」をキュウリの育苗時の培土に添加し、定植後の生育に及ぼす影響と土壌中のβグルコシターゼ活性を検討したところ、1%、2%の両添加区で無処理区に比較し定植時の苗の葉長及び葉数が増加した。しかし、収穫期間中の収穫果数と品質及び収穫後の株元の土壌中βグルコシターゼ活性に対する明らかな影響は認められなかった。
4	トマトの隔離床栽培における肥効調節型肥料による低コスト省力栽培技術の確立(継続)	作物園芸部	JA全農(県本部) ジェイカムアグリ(株)	継(H25～26)	水稲育苗ハウスの空き期間に肥効調節型肥料を用いてポットでトマト栽培を行う場合、6号ポットに土と肥料を混和することで生育が良好になり、収量も5号ポット区、置肥区より増加した。また、果実糖度は混和区の糖度は置肥区よりも高くなった。1a(340株)当たりの資材購入費は57,636円と試算された。
5	ブロッコリーにおける被覆肥料施肥による減肥体系の確立(継続)	作物園芸部	JA全農(県本部) ジェイカムアグリ(株)	継(H25～26)	夏秋品目作付前のパイプハウスの未利用期間にブロッコリーを栽培し、4～5月の収穫に向けての省力的かつ適正な施肥量について調査した結果、前作の残肥が多い場合は、窒素施肥量を露地の慣行量から5割まで削減しても慣行と同等の平均花蕾重が得られ、追肥が必要な化成肥料の代替としてLPコート40を使用することで、追肥および土寄せにかかる作業時間を省略できた。

### 3. 果樹

No.	試験課題名	試験実施場所	依頼者	新・継	結果および考察の概要
6	ナシの効率的施肥技術確立試験(継続)	生産環境部	太平物産(株)	継(H23～26)	ナシ有機一発055の施肥による浸透水中の窒素流出量は、1.5～1.9kg/10aでそのほとんどは硝酸態窒素であり、施肥窒素による窒素溶脱量は年間施肥量の約1割であると考えられた。無施肥区と比較すると果肉中の窒素含量での差異は全くなく果実品質に及ぼす影響は認められなかった。
7	リンゴのヒメボクトウに対する防除体系確立試験(継続)	果樹研究所	JA全農(全国本部)	継(H25～26)	スタイナーネマカーボカプサエ剤の樹幹注入、ヒメボクトウ用性フェロモン剤の設置、フルベンジアミド水和剤の散布に耕種防除法である被害部の切除を加えた体系的な処理はリンゴのヒメボクトウに対して高い防除効果があると考えられた。
8	モモ・ナシの共通防除体系におけるナシ病害虫に対する防除効果試験(継続)	果樹研究所	JA全農(全国本部)	継(H24～26)	モモ・ナシの共通となる病害虫に対して慣行防除体系と比較したところ、同等の防除効果が得られたことから、提示したモモとナシの共通防除体系は十分実用性が期待できると考えられたが、ナシ黒星病常発園やストロビリン系殺菌剤などの耐性菌発達リスクの高い殺菌剤の連用に当たっては十分注意が必要と考えられた。
9	ナシマルカイガラムシ類属の防除時期の検討(新規)	果樹研究所・現地	日本農薬(株)	新(H26)	ナシマルカイガラムシ属の発生が極めて少なかったため、優占種、成虫の発生盛期および果実での被害時期については把握できなかった。また、休眠期のハーベストオイル50倍加用アブロードフロアブル1,000倍の防除効果も判定不能であった。
10	果樹病害の薬剤感受性低下対策試験(新規)	果樹研究所	JA全農(県本部)	新(H26)	本県におけるQoI剤のブドウと病に対する耐性菌の存在を確認しようとしたが、本病の発生が確認されなかったために防除効果及び耐性菌の存在を確認することができなかった。
11	ナシ黒星病の新梢葉における新規殺菌剤の防除効果確認試験(新規)	果樹研究所	フルーツセイバー普及会	新(H26)	ベンチオピラド剤(商品名:フルーツセイバー)3,000倍の生育期におけるナシ黒星病に対する防除効果は少発条件下ではあったが認められた。また、キャプタン剤(オーソサイド水和剤)1,000倍を加用すると更に効果が高まると考えられた。葉害の発生は認められなかった。今後は使用時期について検討する予定である。

## II. 福島県農業総合センター(放射性物質吸収抑制関連)

### 1. 水稲

No.	試験課題名	試験実施場所	依頼者	新・継	結果および考察の概要
12	放射性物質吸収抑制技術の開発-水稲(吸着資材及び吸収抑制による吸収抑制技術の開発)(継続)	生産環境部・作物園芸部 (二本松市小浜地区)	JA全農(全国本部)	継(H24～26)	ゼオライトは施用後3年目においても、一定の放射性Cs吸収抑制効果が認められ、土壌の交換性カリ含量も無処理より高く推移した。また、ゼオライトのCs吸着による吸収抑制効果または保肥力向上によるカリ含量維持効果は認められなかった。

13	放射性物質吸収抑制技術の開発-水稻 (吸着資材及び吸収抑制による吸収抑制技術の開発)(継続)	浜地域研究所 (南相馬市)	JA全農(全国本部)	継(H24~26)	ゼオライト及びびかり資材の施用により玄米への放射性Csの移行を抑制することができた。 また、ゼオライトを散布した区では、していない区に比べ収穫後の土壌交換性カリの減少程度が小さかった。
----	---	------------------	------------	-----------	---

## 2. 大豆

No.	試験課題名	試験実施場所	依頼者	新・継	結果および考察の概要
14	放射性物質吸収抑制技術の開発-大豆 (吸着資材及び吸収抑制による吸収抑制技術の開発)(継続)	生産環境部・作物園芸部	JA全農(全国本部)	継(H25~26)	ダイズの放射性Cs吸収における堆肥とゼオライトの施用効果は判然としなかったが、土壌中の交換性カリ含量を40mg/100g以上に増大させることで、前年度にダイズ子実の放射性Cs濃度が100Bq/kgを超えたほ場において、10Bq/kg未満に抑制することができた。

## 3. 野菜

No.	試験課題名	試験実施場所	依頼者	新・継	結果および考察の概要
15	放射性物質吸収抑制技術の開発-野菜 (吸着資材及び吸収抑制による吸収抑制技術の開発)(継続)	生産環境部・作物園芸部	JA全農(全国本部)	継(H24~26)	野菜類に対して、ゼオライトや硫酸カリ、堆肥などを施用することで、土壌の交換性カリ含量が高まり、放射性Csの吸収抑制効果が認められた。

## III. 県植物防疫協会

### 1. 果樹

No.	試験課題名	試験実施場所	依頼者	新・継	結果および考察の概要
16	コンピューター設置果樹園におけるハダニ類とカブリダニの調査と天敵増加の解析 (継続)	県植物防疫協会 (防除コンサル株)	JA全農(県本部)	継(H24~26)	福島市内の果樹園にはケナガカブリダニ、ミヤコカブリダニ及びフツウカブリダニが広く分布しており、これらの種がリンゴ、モモ、ナシのハダニ類の密度を抑制している。本県では芽だし前にマシン油乳剤と7月上旬から8月上旬にかけて殺虫活性の高い殺ダニ剤を散布する機会が多いが、殺ダニ剤への感受性低下の問題があるので、6月中旬から下旬の梅雨期に10日間隔で物理的防除薬剤である気門封鎖剤による防除が有効と考えられる。